

わたしの 効果倍増! 教材活用術

日々の授業で使う教材や教具。隣のクラスや隣の学校のあの先生は、一体どんな使い方をしているのでしょうか？ このコーナーでは、気になる教材活用術を紹介します。

デジタル教材として「デジタマ」をどのように活用しているか

1. 学習におけるデジタル教材について

漢字や計算の学習は基本的に「紙に書くこと」が反復のベース。それを抜きにして指導は成り立ちません。ですが、この2年あまり、コロナ禍のもと、ギガスクール構想によって、子ども1人に1台のタブレット端末が導入されました。そのような状況から、「子どもたちが家庭でもタブレットを活用して楽しく学習するための教材がないか」と考え、それに合う教材を探していました。

デジタル教材を使う上で大切なことは、教師と子どもたちの負担にならないことです。内容がどんなに良くても、分厚いマニュアルを読む必要があったり、起動して、パスワードを入力して、データを操作して……と、3ステップ以上の手間が必要だったりするものや、子どもたちが操作について先生に頻繁に聞かないとわからないよう

なもの、仮に採用しても活用できないと考えました。

タブレットの導入にあたり、学習場面では「どの学年でも同じくらい活用すること」を目標に、2021年から月1回の講習会を先生方自らが開催してきました。基本として、授業のメインには「ロイロノート」を使い、復習には「Qubena（キュービナ）」を活用しています。今年度はさらに、紙のドリルの付録の「デジタマ」を学習の一助となるように加えました。

2. 2年目の活用状況は

タブレット端末の使用も2年目になり、先生方のデジタル機器の扱いもだいぶ慣れてきました。手持ちのパソコンで授業中に見せたいものをスクリーンに投影したり、子どもたちの状況に合わせて端末に送る課題を変えたりと、スキルも向上しています。



▲「デジタマ漢字」トップ画面。



▲くりかえし漢字ドリル。表紙の二次元コードを読み込むだけで「デジタマ漢字」が使用できる。

授業で休んだ子どもに、その日のノートを撮影してロイロノートにアップロードしてリアルタイムで子どもに提示している先生や、授業のほとんどをデジタルを使って行う先生もいます。ひと昔前からは想像できないほど学習の環境は変わったと感じています。

このような状況のもと、子どもたちには「もっと勉強したい」という意欲を刺激するような指導をしなくてはいけないと思います。子どもがやりたいことをデジタルの活用によって簡単に用意でき、意欲的に取り組むことができる環境が大切です。

2年目は、「ロイロノート」「Qubena」「デジタルマ」をバランスよく活用しています。中でも「デジタルマ漢字」「デジタルマ計算」は、授業時間に使うことが多いです。

低学年では、漢字の字形を覚える場面で効果的に使えています。たとえば書き順では、紙のドリルだとお手本を目で追って書く必要があるのですが、それが不得手な子どもはやり終えるのに時間がかかります。一方デジタル画面上では、書き始めの部分にマーカーが表示されるため、テキストを見る動作をしなくて済み、スムーズに取りかかることが出来ます。また、紙は一度書いたら終わりですが、デジタルだと、繰り返し同じ練習ができます。

高学年は学習量が増えるので、学校でドリルだけに時間を割くことができない現実

があります。その点「デジタルマ」は、タブレットを持ち帰れば家庭で学習ができます。教室で紙のドリルに取り組んだ後は、家庭で「デジタルマ」を使って復習するといった活用もしています。

3. デジタル教材を活用する

メリット

デジタル教材によっては、子どもたちの学習意欲に影響することもあると思います。

たとえば漢字では、「とめ」「はね」「はらい」の基準の精度がきつちりしすぎていたり、マルをもらうのが容易ではありません。採点基準としては正確でも、漢字が苦手な子どもは、書くこと自体が不得手なことも多く、苦手意識が強くなってしまう。「合格」の花マルがもらいやすいデジタルドリルだと、子どもたちから好評でモチベーションも維持されます。

計算では、手書き文字の誤認識が多いと使い物になりません。また、認識に時間がかかるのとストレスになります。一方で、印刷教材版のドリルと内容・準拠が完全にリンクしている、苦手な子どもでも、見慣れない問題を出されて解くのに苦心することがなく、比較的簡単に取り組むことができます。

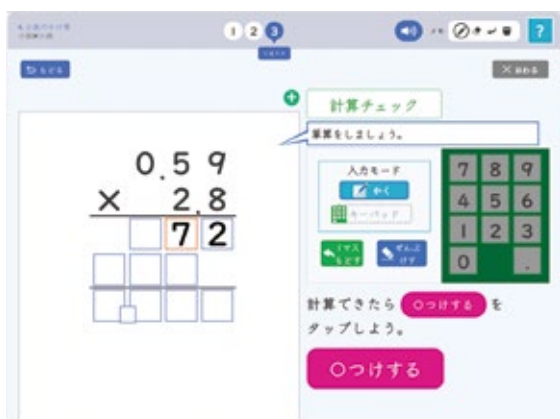
鉛筆を持って紙に書くことは学習の基本で、教師としてはそちらを重視しますが、



▲花マルがもらえると子どもたちのモチベーションも維持される。



▲漢字のなぞり書き画面では、始筆の位置や注意点が示されている。



▲計算チェックでは書いた数字がすぐに自動変換される。テンキー入力で切り替えることも可能。



▲「デジタル計算」トップ画面。

「デジタル」の取り組みについて、今年度の成績では評価の対象にはしていません。紙で行う漢字テストの得点は評価の対象ですが、タブレットの使用頻度は子どもたちによって違います。それがやる気の問題なのか、単に家に持ち帰っていないか、など、ほかの要因があるのかを判別できないからです。

生まれたときからデジタル機器が身のまわりにある「デジタルネイティブ」世代の子どもたちは、大人以上にタブレットの操作に慣れていきます。そんな子どもたちにとっては、紙に書くことよりも、デジタル入力の方が快適なこともあるのかなと思います。

4. 次に考えたいのは
デジタルと紙のバランス

こだわりの強い子どもだと、何度も書き直して次の学習になかなか進めない場合もあります。タブレット学習はその点を解決してくれます。

一方教師にとっては、宿題の小テストやテストのプリントを作成する手間が省けたことで、教材研究など、その他のことに時間を使える余地が生まれたことが大きなプラスです。これからは、子どもたちの学習状況に合わせた、一段階進んだ機能があるところではないかと感じているところです。

ひと昔前に比べて、学習の環境は大きく変わりました。練習量が重視されていた頃から、現在は、やり方が途中で示してあったり、それがわかった上で子どもが飽きない分量だけ取り組ませたりするようになっていきます。

子どもの実態に合ったデジタルドリルに取り組ませることで、子どもが求めるポイントにきめ細かく対応することができそうです。1年間使ってみてわかったことを教師全員で考え、共有しながら、日々の指導に活かしていこうと思います。

す。ただ、いくらタブレットで書いたり入力したりしても、いざテストになると同じようにできなかったり、書けなかったりという場合も多いです。

記述スペースの問題もあります。高学年になって算数の文章題が出てきたときは、ノートの空欄を自由に使って書きたい子も出てきます。しかしタブレットでは、現状はメモ欄のスペースが制限されており、書く量が多いと書ききれません。

デジタルと紙の教材の最適なバランスはどこなのかを追究しながらも、まずは実際に紙に書き、その後で時間ができたときにタブレット、という具合に、学習の順位づけがあった上で、子ども一人ひとりの状況に合わせた活用が望ましいのではないかと考えています。